

series Salamander in the circle

# リ・コンストラクション

第二部

第八章

*With three*

峯村 明

# リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[8・With three](#)

[121.](#)

[122.](#)

[123.](#)

[124.](#)

[125.](#)

[126.](#)

[127.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

## 登場人物

桧山 健	21歳の大学生
間宮 ひろ	日本の高校生
レル・ヴァリス	16歳の医学生

## 8・With three

121.

この三月から、ひろは高校三年生。高校生としてやりたいこともあるだろうし、卒業後のことも考えなければならない。だから――

「選択肢のひとつに加えてみてほしい」

――選択肢って。

- a・大学進学
- b・専門学校進学
- c・企業へ就職
- d・家事手伝い

くらいしか考えてなかったけど。え、e・えええええ永久就職！？

「急な申し出だということはわかってる。オレはいつまでも待つから、ゆっくり考えてほしい」

――なおみおばさーん

……どうしよう……なんかあたし、プロポーズされちゃったみたいだよお……

高校はもう春休みに入っていて、翌日は午前中だけ部活があった。夜はどこかで食事しよう、新城マンションへ迎えに行くよ、ということになっていた。

ひろは無心にトラックを走り、部員たちと騒ぐ気分になれず「かわい亭」への誘いを断り、無心に自転車をこいで湖岸公園を抜けようとした。

(——あれ？ あの車——)

車種もナンバーも間違いない、昨日、桧山が乗っていたレンタカーではないか。それが公園駐車場にゆっくり入ってきた。

(——助手席に誰か乗ってる——)

ひろは無意識にブレーキを握りしめた。

(べつにさ、誰を乗っけてたって、いいけどさ)

胸がざわっと波だった。彼だって二年ばかりここに住んでたんだから、知り合いに会うくらいのことはあるでしょ、と自分に言い聞かせたところで、最初に感じた『もやっ』はどうしようもない。

(昨日のぷろぼーずはなんだったのよ)

(もしかしてあたし——からかわれた?)

枝垂れ柳の陰でこそこそと見ていると、運転席のドアが開いて、降りてきたのはやはり桧山。助手席からでてきたのは——

(きんぱつ?)

金髪の子はドアを閉めると、両腕を突き上げるようにして大きく伸びをし、桧山に向かってなにか言った。その声は——

(え？ 男の子?)

桧山は金髪の男の子の方を振り向いた。そして、ひろと目が合った。

枝垂れ柳の陰の、恨めしくも冷たいひろの目に、桧山はぎょっとして後ずさり、金髪の男の子とひろとを交互に見た。ひろは——わけもなくかっとなって、逃げ出そうとし、自転車のタイヤを歩道の縁石に引っ掛けた。あげく。自転車ごと仰向けにひっくり返った。

「ぎゃああ！！」

見るも涙、語るも涙の醜態だが、制服のスカートではなく、ジャージだったのは不幸中の幸いだった。

「Oh!」ひろの悲鳴に金髪の男の子は驚いて振り返り、間髪入れず駆け寄ってきた。

桧山の目の前ですっころぶのは二度目。どーしてこーなるのよ！ し、しかも、お、おーまたびらきで！

「どこか捻ってないか！？」と、口走りながら走ってくる桧山をにらみつけていたせいで、金髪の男の子が自分の体のあちこちを触っているのに気づかなかったひろである。気づいた時にはシューズを脱がされていた。

「な、なにすんの！！」

金髪を引っぱたこうとしたが、相手はすっと身をかかわしてしまった。

「right ankle——sprain——」

「え？」

「右の足首、痛くないかって言ってるんだ」

「え、べつに。どこも痛くない」じつはお尻が痛かったが黙っていた。脱がされちゃあたまらない。

桧山は金髪とひろの間を通訳する。「最近、ねん挫とかしてないか？」

「あ、去年の秋、ぼーっとしてて、階段踏み外したわ、たしか右足だった」「で、でも、二週間くらいで直っちゃったし、すぐにふつうに走れるようになったし」

金髪といくつかやり取りしたあと、「痛みがないなら、問題ないだろうって」

(だからお尻以外はどこも痛くないって言ってんじゃん！ のーぷろむれぶよ！)

「おまえ、何か月も前のねん挫がわかるのか？ 本人が忘れてるのに？」と、桧山はうっかり日本語で言い、相手はその問いにうなずいたが、青い目はひろを見ていた。ひろも金髪を見ていた。ふたりは見合っていた。そして、とつぜん——

「——レル・ヴァリス？」「——マミヤ？」

「ん？」楡山はふたりを交互に指さした。「オレ、おまえたちのこと、紹介したっけ？」

「——レル・ヴァリスでしょ？」「——マミヤだよな？」

123.

「おいおいおいおい！」手を取り合っている二人の間に楡山は割り込んだ。「おまえたちはいつ知り合ったんだ！」

ふたりは改めて顔を見合わせた。「いつって——いつなの？」「さあ。でも、きみはマミヤだろ？」  
「あなたはレル・ヴァリスよね？」

「なにを親しそうに手を握り合ってるんだ！！ ひろ、曲がりなりにもおまえはオレの婚約者だ！！」

「勝手にきめないでよ！ なによ、半年もほっといたくせに！ いままでなにしてたのよ！！」

「ケンはおぼくらと遊んでたよ。あんなことやこんなことして」「ええっ！ あんなことやこんなことを！！」

「レル・ヴァリスおまえちょっと黙ってろ」

「昨日までは渋くていいムードだったのに！ おまえがいきなり来たせいで！！」

\*

レル・ヴァリスがなぜいきなり現れたのか、説明しておかねばなるまい。

今朝早く。健はメールに気づいた。

「レル？ どしたんだ？ なになに、日本の見どころを教えてくれ、だって？ ん？ 今どこにいるんだ？」

メールはまどろっこしいので電話してみると、

『ケン？ ひさしぶり！ メールみてくれた？ 今？ 日本だよ、セントレア空港』

『延長してもらった夏休みももうすぐ終わるから、せっかくだから日本へ行っておこうと思って。温泉につかってラーメンを食べるんだ！ え、きみも日本に来てるの！？ 奇遇だねえ！』

こうして、あれよあれよという間に空港から電車と高速バスを乗り継いできたレルを、直近の高速バス停留所まで拾いに行ってきたのだった。

## 124.

「とりあえず、なんか食べたいな。ラーメンもいいけど、お好み焼きもたべてみたい」

「お好み焼きなら、ひろ、おまえの行きつけの店が——」

「あー！ あそこは今日、定休日だから(じょうだんじゃないわ陸上部で満杯のとこなんて)！

ラーメンにしよ、ラーメンに！ ラーメンだったら『KA-Y』がおすすめよ！」

「カワイ？」

「『KA-Y』だってば」

「？」

\*

この界限、「かわい」の名のついた飲食店が多い。初代はこじんまりした温泉宿だったというが、なんでも、初代のせがれが事業を大きくしたらしい。

『旅館・河合本陣』、『割烹・かわい』、『ファミリーレストラン・kawai』、『お好み焼き・かわい亭』、『本格中華・河合楼』、『ラーメンKA-Y』、『ゲーム & カラオケ・Y-Y』などなど、もう聞くだけでお腹いっぱい、カワイづくし、石を投げればカワイに当たる。

桧山にいわせれば「オレはネーミングにセンスがない店にはいかない、タイトルにセンスを感じない小説なんか読む価値がない」。

桧山よ、そなたの言い分にも一理あるとはいうものの。創造主の機嫌を損ねると自身の出番が少なくなるという道理を知っておくべきである。

\*

昼時を回った『ラーメンKA-Y』はほどよく空いていた。

「ぼくビギナーなんだけど、どれがおすすめ？」

「えーラーメン初めて？ めずらしいわね。だったらシンプルにお醤油ベースにしてみたら？ 味玉とチャーシューが乗ってておいしいわよ。ネギは平気？」

「たぶん平気」

「あ！ いっけない！ あたしお財布に五百円しかないんだった！」

「だいじょうぶだよ、ケンが払ってくれるから。ぼくビールたのもうかな」

「じゃあ、オレも」

桧山はたしなめるところか、おまえなんか未成年飲酒の罪で補導されてしまえと、こっそり煽り、飲酒がもとで合宿中止の憂き目にあった経験のあるひろはこういうことには敏感で、「どっちもダメにきまってるでしょ！！」

(なんだかなー……)

アラビアンなアナウンスが流れる異国情緒にあふれたハマド国際空港をひとりで歩いた、孤独なあの時に戻りたいと思うのだった。

(こいつと結婚したら毎日こうなるってことか？ 早まったかな——考え直そうか——でも言いたしたのはこっちだし——プロポーズのキャンセルってできるんだろうか)

125.

「レルって、なんか刃物のイメージがあるのよね」とひろが言い出す。

(たしかに、メスを握るらしいからな……)

「前の時も大きな刃物持ち歩いてたわよね？」

「……前の時？」、と桧山。(その時は包丁でも持ち歩いてたのか?)

「前の時って、前の時よ。ぜんせい？」

「うん、前世。マミヤはあの頃も健康的に日焼けしてたよね」

「ふーんだ、今も真っ黒だっただけいいいの？」

「そんなんじゃないよ、変わってないな、と思うだけだよ」

「おまえたちは——前世から知り合いだった、と？」

ひろとレルは同時に顔をあげて、同時に桧山を見た。

「桧山さんもいたような、気がするんだけど」

「うん、そんな気がする。でもはっきり思い出せない……」

「あ。わかった。桧山さん、名前が違うのよ」

「名前？」

「そうよ、あなたはレル・ヴァリスであたしはマミヤ。だからすぐぴんときたんだわ。でも桧山さんは違う名前だったのよきっとそうよ」

桧山は頭を抱えなくなった。こいつらにはついていけない。会話が異次元すぎる。

「ケン、そのうち思い出すよ」と気の毒顔のレル・ヴァリスに慰められても嬉しくもなんともない。

オレには孤独が似合ってる、と物思いに沈みそうになる桧山をレルは放ってはおかない。

「ぼく、行きたいところがあるんだけど。キリガミネって、知ってる？」

「霧ヶ峰？」

レルは自分のリュックを漁ってなにか取り出した。本だ。赤い表紙はかなり擦り切れてて、いかにも古い。

「ひいおじいさんの遺品なんだ。ぼくが生まれる前に亡くなってしまったけど、若い頃のひいおじいさんはぼくと似てたらしい。それでこの本はぼくがもらった」

「それ——まさか、『キリガミネ探訪』じゃないだろうな」

「そうだよ、『キリガミネ探訪』。ケン、きみ読んだの？ ねえ、何が書いてあるの？」

「持ってるだけだ。オレはフランス語は読めないから。でもおまえなら読めるだろ」

「え、この本、日本語だよ」

「……え……」

「なんでも、フランス語版とドイツ語版と日本語版があるんだって。最初から三カ国語で書かれたそうだよ。うちのひいおじいさんも日本語ぺらぺらだったっていうし。そんけいしちゃうよ」

「おまえだっていつの間にか日本語しゃべってるじゃないか」

「便宜上しゃべってるけど、読み書きは別」

ちょっと見せて、と、手に取って開いてみる。なるほど、たしかに日本語だが、活字の字体は古く、細かく、行間は狭い。つまり、読みづらいことこのうえない。読むのを諦めて奥付をみる。著者はアルベルト・フォン・ラウレンス。大正15年初版。西暦で何年だ？ この前の年に健の曾祖父・正太郎氏はこの著者と会っているわけだが、もちろん、そんなことは本のどこにも書かれていない。

「ひいおじいさんはラウレンスという人と友達で、いっしょにキリガミネを探訪したそうなんだ」

桧山は思わず顔をあげてレルを見た。その人はいったい何者なのだ。ラウレンスという名には強い磁力のようなものがあつた。心臓がぎゅうっと、反応する。奈々子の部屋でその名を聞いた時と同じように。

レル・ヴァリスの曾祖父が——ラウレンスと関わりがある？

間宮 ひろとレル・ヴァリスは前世から互いを知っている??  
『キリガミネ探訪』日本語版をレル・ヴァリスが、フランス語版をオレが???

さらにここにはラウレンス氏と健の曾祖父との出会いが追加されるが、それは本人たちしか知らない。

自分の身に何か起こっている。しばらく前に感じたその『感じ』が、ふたたびやって来た。

127.

霧ヶ峰。知ってるもなにも、すぐそこだ。かつてラウレンス氏は竜神湖.....これは観光用の名で、本来は水津早湖.....畔から徒歩で通ってたくらいである。しかし現代は自動車という便利なものがあるから、これを利用する。

春のお彼岸すぎとはいえ、標高の高い霧ヶ峰はまだ冬。

レルは、「どーして外国人て、いつも半袖短パンなのよ」とひろにあきれられ、いちおう、防寒の準備をしてきた日本居住経験者・健にいろいろ貸してもらった。  
「マミヤだって半袖短パンじゃないか」「あたしはいいの、部活の帰りだもん！ でもこの格好でお出かけするのは色気なさすぎだから、桧山さん、マンション寄ってってね」「だれもおまえに色気を求めてない」「.....なんですって.....」

結局ひろはトレーナーにジーンズという、だいたいいつもの格好にスポーツ用の防風防水ジャケットを着こんできた。  
「へえ、なかなかおしゃれなジャケットだな」と感心する健の前でぐるりと一回転。背中には『水津早高校』のネームが入っていた。「.....まあ、いいけどさ」

三人寄ればなんとやらで、健の運転で三人、わさわさと出かける。途中、ガソリンスタンドで燃料を補充しつつ、情報を仕入れると、霧ヶ峰を縦断する観光道路は冬季は積雪のため閉鎖されているというではないか。開通は四月の終わり。一ヶ月も向こうだ。

「んだが、八島までなら行けるに。今年は雪少なかったで、都会の人でも大丈夫せ。行ってみましょ」

とスタンドのおじさんに勧められ、

「ケン、雪道ならぼく平気だよ、くにで何度も運転したことある」

レルの手出し口出しを払いのけ、車を出した。ちなみに、レルの『運転したことある』、は、速度挙動交通法規、すべてクリア、違反しているのは年齢だけというレベル。ふつうの人間に課せられる、経験を積み重ねるというプロセスが、彼には要らないのだった。うらやましいことである。

山中を走る県道はほぼ一本道で、迷うことなく観光道路の閉鎖されているゲートへたどり着いた。ガソリンスタンドでもらった観光案内のパンフレットをたよりに、八島ビジターセンターなるものを探し当て、駐車場に車を止めた。パンフによると、ここから湿原の遊歩道に入れるのだという。

春の陽射しは暖かいが空気は刺すように冷たい。

ひろは健が車から降りてジャケットを着こむのを日なたで待っている。なぜか……ときどきする。何かが起こりそうな気がする……

その間に、レルはひとりで遊歩道へ入って行ってしまった。先の方で立ち止まって、「ken!」と声をかけてきた。「excrement!」

健は、えっ、と立ち止まり、ひろの腕をつかむ。

「な、なに!？」

「足元、気をつけて。踏むなよ」

「あ……ぜんぜん、ロマンチックじゃないわね」

「まったくだ」

## 8・「With three」

9・「Hiro's summer-1」へ続く



## あとがき

三人で、ってどういうメンバーかと思ったらこの人だった。  
まあ、二人だと話が行き詰りそうになることがあるけど、もう一人いると楽しく？進みます。お邪魔といえど邪魔ですけどね。

表紙画像は八島湿原。春のお彼岸にはこんなに青々してません。雪が融けた原野は茶色一色で、絵的にいまひとつなので。  
しかし、気がつけば、作中の日本での季節と現実の季節がリンクしてる。作中でもこれから夏に向かいます！

2025年3月29日 記

奥付

リ・コンストラクション

第八章 With three

2025年 3月30日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社